

大構造改革の焦点はどこにあるか第10号(2002年08月07日)

第10回 日本再建に欠かせない動物型生命遺伝子の復活

その1

動物型社会構造と植物型社会構造によって異なる国家の役割...動物型生命遺伝子を退化させてしまった植物型他力依存国家統治システムのゆきずまり

<目次>

1. 動物型生命遺伝子を持つ社会と植物型遺伝子を持つ社会とで異なる社会の構造...競争重視と安定重視

- (1) 動物型社会システムと植物型社会システムの組合せと変化...国際化による動物化の流れ
- (2) 集団目的によって異なる国家の役割

2. 集団の生い立ちによって異なる動物型競争システムと植物型生活システムの組合せ(イメージの図解と解説)

- (1) 動物的交りの深い市場経済先進国(米・英)
- (2) 動物型・植物型社会システムの分別と組合せ(中国・ドイツ)
- (3) 動物型競争促進と植物型生活安定とをバランスさせる諸外国における国家の役割(米・英・ドイツ・中国)

3. 植物型バブルをひきおこし動物型生命遺伝子を退化させてしまった日本の国家統治システムの混乱

- (1) 動物型遺伝子の暴発によって発生しているアメリカバブルとは異なる日本型植物願望肥大バブルの後始末の難しさ
- (2) 日本における動物遺伝子と植物遺伝子の組合せと国家の役割
- (3) バブル空間が膨らんだ原因と影響と後始末

4. 構造改革のポイントは失われつつある生命遺伝子の復活にある...

それは植物型社会には効果の薄いケインズ型投資依存政策から脱却し自ら動物遺伝子を再生させることにある。

前回においてアメリカ型の証券・金融・資本市場システムが、公益軸と投資循環システムとプライスメカニズムという風の紐で結ばれて空を飛ぶディーラー型のメカニズムであるのに対して、日本のメカニズムは同じような用語を用いているが、その全体の組立て方は基本的に異なっていると説明してきた。

それは、国全体で市場経済競争総出力をあげられるように社会構造そのものが動物的遺伝子を備えた人工ロボットのように精緻に組立てられているアメリカの社会制度と較べてみると、日本の社会構造は数百年、数千年もの長い間護られてきた土地・天依存、人中心の農耕植物型のインフラメカニズムがそのまま残っている世界の先進国の中でも珍しい社会構造が保たれていることである。

前回、その日米間のメカニズムと用語の使われ方の違いを4つの表にまとめて説明してみたが、今回はこうした社会構造の違いについて、日・米だけでなく他の市場経済諸国と比較して考えてみることにしたい。

こうしてその違いを調べてみると前回までのブローカー・ディーラー型といった仕事のあり方の違い以上に国家そのもののつくりが農耕民族としての文化をより多く残している日本と、早くから世界との交わりとの経験を生かして成長してきた動物遺伝子で組立てられた国家とでは、その国家を統治するメカニズムそのものが驚くほど違ってきていることが分ってくるのである。

それは、戦争とか市場経済競争という民族の存亡をかけた争いの中で変化を先取りし、適者生存原理の中で生きのびるために必要な強い動物遺伝子をもった欧米型の国の統治システムと、有史以来一度も国家、民族、全滅の危機に晒されることなく平和な植物的遺伝子を継承しながら太陽の光と水を頼りに皆で仲良く暮らしてこれた日本の国のかたちとの違いである。

なかでも第二次大戦後、安保条約によって生命の安全が危機に晒されることのなかった日本と動物遺伝子を持って競い合う国々とのギャップはさらに大きく開きつつあるように思えるのである。

そうした意味で、今一度国家の役割、社会インフラシステムの作りについて、世界との交りの深い動物遺伝子を持って創り上げられている諸外国の社会システムと、植物型遺伝子を強く残したまま共生しようとして作りあげてきた日本の社会システムとの構造上の違いを明らかにしてみたいのである。

1 . 動物型遺伝子を持つ社会と植物的遺伝子を持つ社会とで異なる社会の構造...競争重視と安定重視

(1)動物型社会システムと植物型社会システムの組み合わせと変化...国際化による動物化の流れ

世界の歴史を見ると人の動きが少なかった天動説時代のように、土地をベースとする農耕中心の社会システムが、やがて地動説時代に入って文明開化が進み人の動きが激しくなるとともに、世界中の社会システム全体に亘って交りが深くなり動物的競争が広がってきている。

こうした大きな流れの中で、人々は群を作り、国を作り競い合いながらお互いに新しい文明を創り上げてきている。そして従来の村単位の集団が束ねられ、やがてアメリカのような合衆国連邦となり、さらにEUのような連合体となって大きく束ねられながら動物的生命力の拡大と知的競争が一段と活発になってきている。

その流れの中で、動物的競争のゆきすぎから発生する戦争とか経済紛争を避けるための工夫が重ねられ、世界首脳会議、WTO、社会システムの国際標準化など国際コントロール機能の発達もあって、限られた空間の中で継承されてきた各集団の島の文化を生かしながら、空・海を中心とする地球規模で文明と共生しようとする動きが加速されつつある。

こうした流れの中で、動物活動型の集団生命力を生かして市場経済効率を追求するエコノミー競争力が求められる一方で、それぞれの生活環境を守るための地球規模での土地、植物型のエコロジー対応が求められるなど、競争と調和という相矛盾する難問の中で世界中の国家は悩まされるようになってきたのである。

日本は今、こうした動物型市場経済効率追求と平和な生活確保という2つの大きな潮流の中に身をおいて、激しく変化する世界の政治、経済、社会システムに対応せざるをえない立場に追いこまれつつあるのである。

(2)集団目的によって異なる国家の役割...動物的競争目的と平和生活目的

動物型狩猟民族が作りあげてきた国家形成の究極の目的は、如何に効率的に得物をとるかにかかっている。

その目的を実現するために、異質者間で作りあげた集団社会構造の中により強い遺伝子を

持った人工心臓機能を埋めこみ集団で世界中を飛び回れるような国家のシステムを創り上げたのがアメリカである。

その主語は人工集団全体の生命力であり、その目的は企業活力、徴税力、国家信用力という総合出力を高めることによって実現されるものとしている。

国家の役割りは、その動物集団のリーダーとしてその集団全体の動物遺伝子を強める工夫をし、その目的に従って如何に人工心臓国家の総出力を維持・向上させるかにあるとされている。

一方、日本のように守られた土地をベースに天の恵みを生かして勤勉に働けば植物も動物も人間も共生できてきた農耕民族が求めてきたのは平和な生活である。

そしてその国家に求められてきたのは群の長としての秩序の維持であり、群の安全である。

その出力は、すべて天の采配と勤勉に委ねるしかないとされてきている。

その遺伝子の中には、適者生存を賭けて競い合う為に必要な、先見力をもった目、より早く遠く飛べる翼、より強い爪、より優れた頭脳を備えた動物的遺伝子はあまり必要とはされてこなかったのである。

当然のことながら強い動物型生命遺伝子を持ち人工心臓機能を備えて活動するアメリカのような国家と、すべてを天に委ねる植物型の国家とでは、同じような社会インフラメカニズム用語を用いてはいるが、その社会構造も目的も機能も、そのメカニズムを管理する国家の役割りも根本的に異なっているのである。

前回まで何回にもわたって「原発と水車」「ディーラーとブローカー」「ザ・マーケットと村のバザール」などという言葉で国際、証券、金融、資本市場システムのメカニズムの基本的な違いを表現しようとしてきたが、これらの対比語に共通しているのは自らの意思で自由に行動を起こして動きまわって結果を求める「動物型」と、自らの意思では動けない受動的な「植物型」との違いにあるのである。

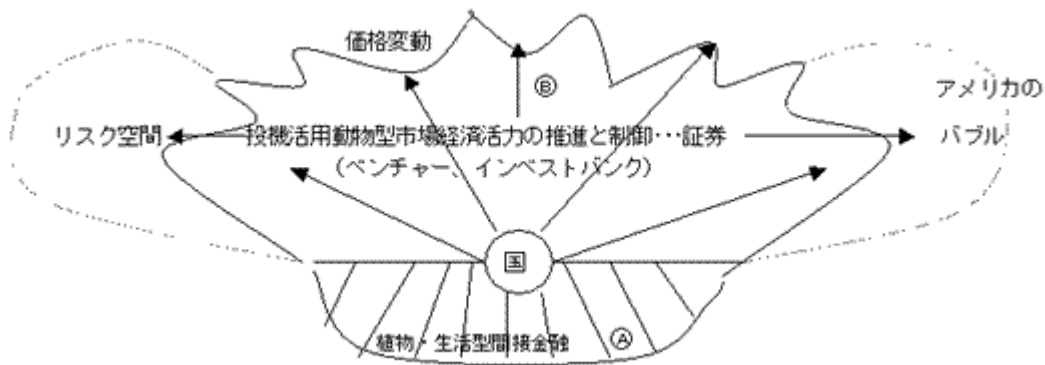
極言すれば生きるための殺しを認められている野生の動物と、生命は天に委ねる植物との違いである。

2. 集団の生き立ちによって異なる動物型競争システムと植物型生活システムの組合せ(イメージの図解と解説)

...世界の国々の生き立ちから国家の形態を比較してみると、動物的交りの大きい国と植物的生活基盤の大きい国のグループに大別される。

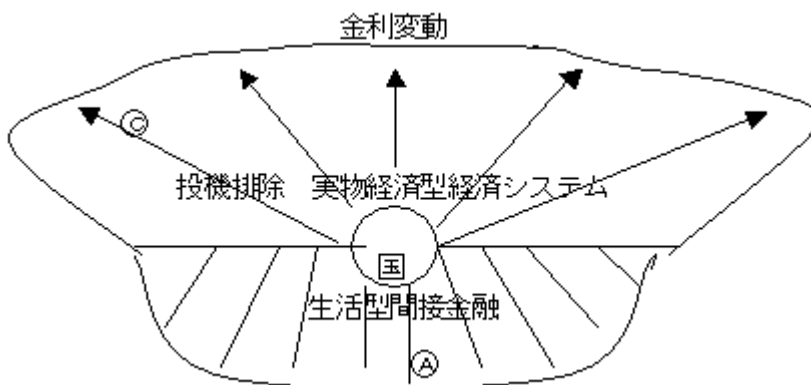
(1) 動物的交りの深い市場経済先進国(米・英)・・・動物活動力の活用、制御と国家の位置づけ

(アメリカ) 動物活力を刺激する投機信用活用型の経済システム



自由・競争・独立を求めて新大陸アメリカを開拓したアメリカは、各州ベースで創り上げた植物、間接金融型社会システムAを連邦ベースに一元化してコントロールするとともに、異質者集団の持つ強い動物型遺伝子を使ったB投機信用力を利用して刺激するアメリカ独特の証券・金融・資本市場システムを創り上げ、国自らがその推進・制御メカニズムをコントロールできるようにしている。(ザ・マーケットをコントロールするN A S A... F T C、S E C、F R B、機能)

(イギリス) 市場型実物経済システム



イギリスの市場経済システムの作りは、アメリカと同じように生活型間接金融システムAをベースとして、その上に実物経済をベースとする市場経済システムCを重ねているが、

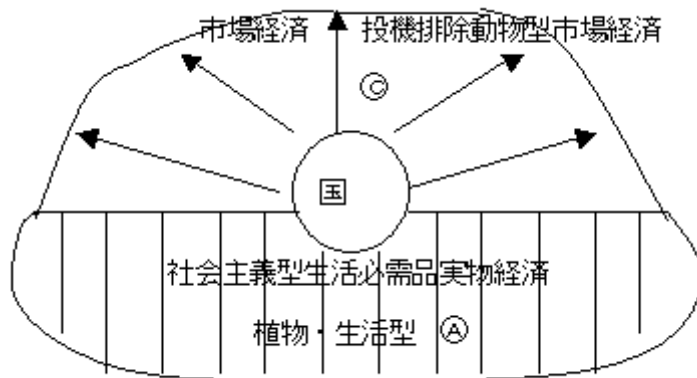
アメリカとの違いは激しい価格変動を伴う投機信用を排除することによってマネーの暴走が発生しないように工夫されていることにある。

国はAとC実物経済ベースのコントロールに徹しアメリカのようにB投機信用経済コントロールするために必要なSECのような激しい制御機能を必要としない特色を持っている。

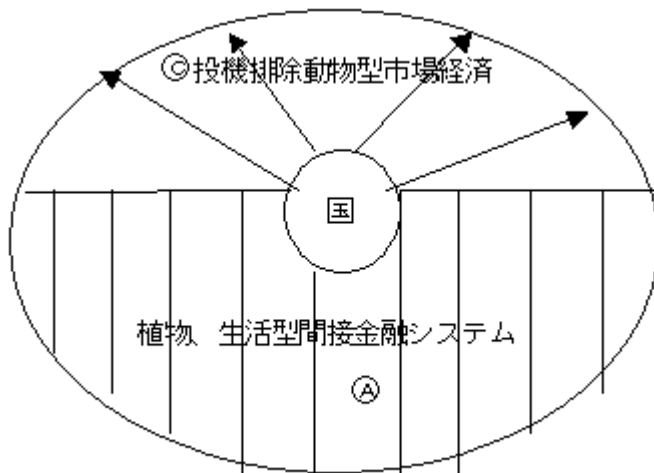
(2) 動物型・植物型社会システムの分別と組合せ (中国・ドイツ)

…社会主義型生活必需品供給のための間接金融システムAを軸に、国際競争力を必要とする投機排除動物型市場経済システムCを分別して組合せ、ACシステムを国家がコントロールするシステム

(中国) 生活必需品経済Aをベースに国際競争を必要とする実物経済Cを重ね国がACをコントロールするシステム



(ドイツ) 間接金融システムAを国家統治の軸におき、投機を排除した市場型実物経済をC分別しコントロールするシステム



(3) 動物型競争促進と植物型生活安定とをバランスさせるための国家の役割

この米、英、中国、ドイツ、日本を比較した場合、その社会構造と組合せについていくつかの特色がみられる

1.それは何れの国も土地、植物、生活をベースとするタテ軸型の間接金融（商業銀行）システムAがベースになっている。

2.そのAの度合の大きさは中国（社会主義）、日本、ドイツ（間接金融）、イギリス、アメリカの順であるが、経済のグローバル化とともに市場経済競争型の直接金融システムがBC増えつつある。

3.この市場経済競争型の直接金融システムも、投機信用を利用して、より大きな収穫、より秀れた品質を求めてベンチャー活動するアメリカ型の投機信用活用経済システムBと、投機を抑制した市場経済システムを持つ、Cイギリス、ドイツ、中国に分れるが、このBアメリカ型の投機活用型のマネー経済システムの急激な発展によって、近年グローバル化が加速するとともに、その副作用が問題になりはじめている。

4.各国それぞれに植物、生活、間接金融（商業銀行）型の社会システムAをベースに直接金融型の国際市場経済競争システムBCとを組合せる工夫を行ない競争の促進と社会秩序の安定という難しい命題に取り組んでいる。

問題は国際化の進展とともに市場、金融メカニズムは一段と複雑化し、ますます変動が激しくなる証券・金融・資本・通貨市場システムと財政、実物経済、資産経済システムとのバランスを保つために必要な決済機能の重要性が求められているなかで国家としての基本軸を保つことの難しさである。

3 . 植物型バブルをひきおこし動物型生命遺伝子を退化させてしまった日本の国家統治システムの混乱

(1) (1) 動物型生命遺伝子の暴発によって発生しているアメリカバブルとは異なる日本の植物願望肥大型バブルの後始末の難しさ

アメリカは1929年の大恐慌以来、投機信用活用型の市場経済システムを制御するためSECを中心に強烈的な市場規制システムを完成しバブルの再発を防いできた。

しかし1975年以降、再び投機信用活用システムを拡大しすぎて2001年大恐慌の再来ともいえる市場の混乱に直面している。

問題はこのアメリカのバブルと日本のバブルの発生原因が同一視されていることにある。

アメリカのバブルは動物遺伝子が強くなりアクセルを吹かせ過ぎた結果、強じんに作られたと言われているブレーキがきかなくなる「動物欲望バブル」であるのに対し、日本のバブルは植物型願望が膨らませすぎながら天然ブレーキしか備えていないために発生した植物型バブルである点である。

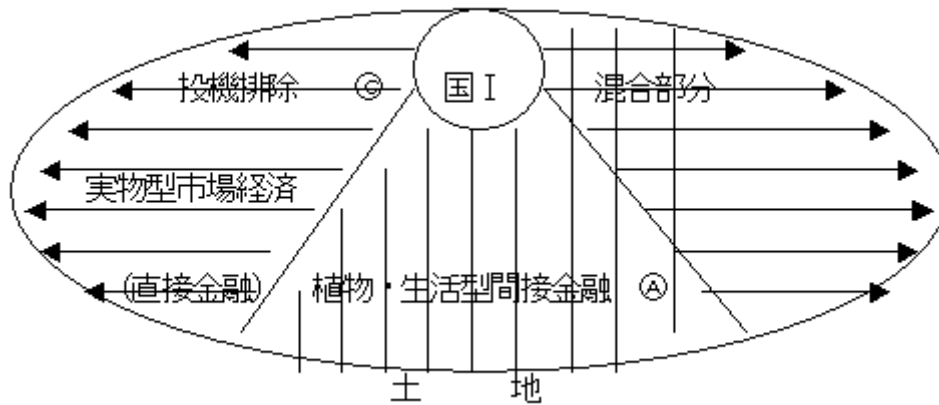
つまりアメリカは旺盛な欲望エネルギーを人工的な制御メカニズムで対応できるように異質者間で人工的に作り上げた国家として推進・制御・決済のメカニズムが出来上がっている中での再爆発であるのに対して、日本のバブルは植物型願望が膨らみすぎながら天然ブレーキしか備えていないために決済ができなくなって発生と植物型バブルである。

日本は欲望も制御も決済も天に委ねる天然メカニズムに頼っている植物願望型のバブルであるだけに国全体として後始末が難しいのである。

第2次大戦も今回の市場経済バブルも同じようなメカニズムで発生しているのである。それは動物遺伝子と植物遺伝子との持つ決済方法の違いから生まれた争いである。

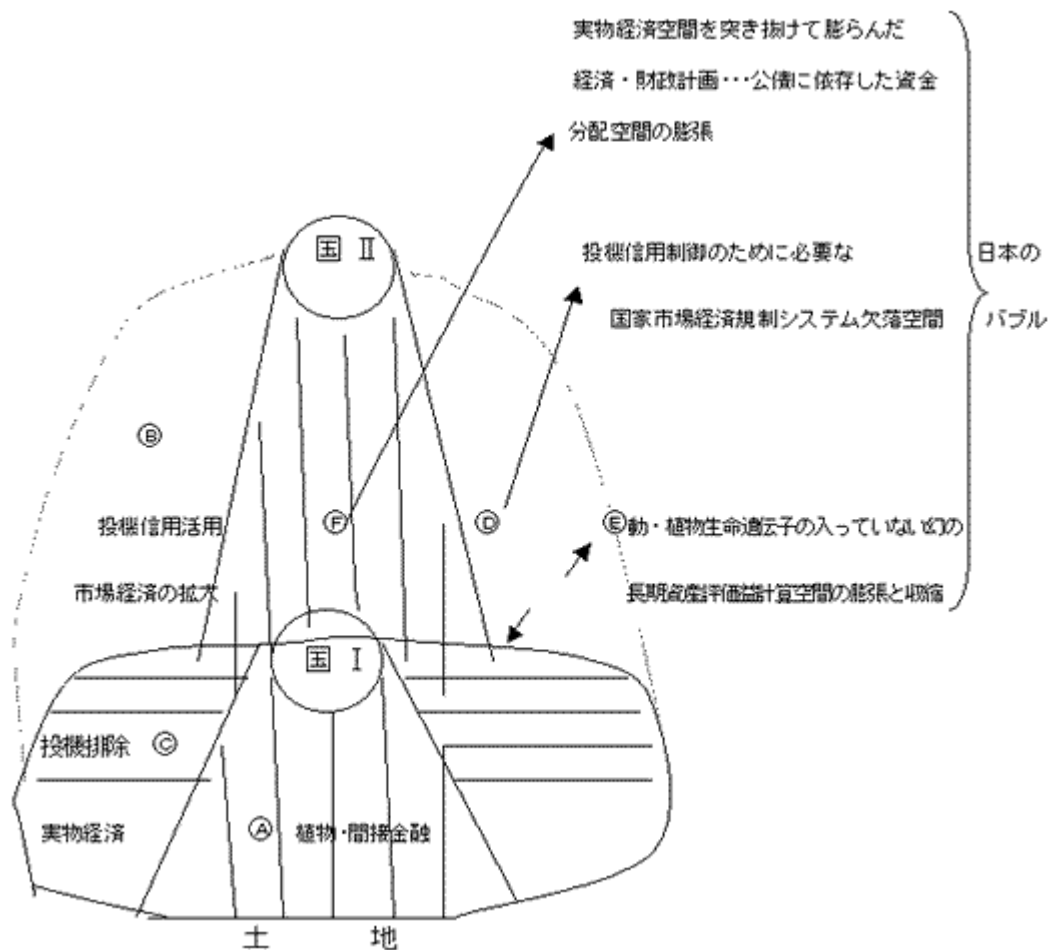
(2)日本における動物遺伝子と植物遺伝子組み合わせの変化と国家の役割

バブル発生前の日本の国のかたち(1980年まで)



バブル前の国はA C 混合システムのバランスの上によって財政の均衡を維持し国家と統治を行なうことが出来たのである。 国

バブル発生後の国のかたち



(3) バブル空間が膨んだ原因と影響と後始末

(国の基本軸のブレ)

バブルが発生した原因はバブル発生前まで正常に機能していた 国 を頂点としてA C 投機排除実物経済と植物・間接金融システムのバランスがとれ、財政収支の均衡が保たれていた空間が、バブル後は実物経済空間を突き抜けて 国 を頂点とする空間Fに膨らんだことにある。

(この空間を膨らませた直接の原因は)

B 動物エネルギーを刺激するための投機信用活用型の市場経済競争システムが導入されながら、
D 投機信用制御のために必要な国家市場経済規制システムが欠落していたために、
E 動・植物生命遺伝子の入っていない幻の長期資産評価計算空間だけが膨張し、
F 公債に依存した経済・財政計画・分配空間だけが膨張して決済不能となってしまったことにある。

(具体的には)

銀行の市場接近によって投資効率に関係なく無限に投機信用エネルギーがマーケットに供給された結果

- ・ 収益の裏付けのない資産価格の嵩上げ(財産目録につけた価格)
- ・ リスク挑戦力を持たない形だけの資本(名目だけの自己資本の充実)
- ・ 再投資収益を得られない非常用の食糧として蓄積した「備蓄米」を「たねもみ」として評価・計算し
- ・ 動物型生命遺伝子も植物遺伝子も持たない各目資産だけが膨らんでしまったことにあるが

(遺伝子の退化と遮断)

- ・ 最も大きな問題は世界中の動物生存競争下で得られた企業の国際活動収益が、このバブル空間において浪費され遺伝子の循環が妨げられていることにある。
- ・ このバブルの発生、膨張、収縮の流れの中で弱者保護の名のもとに分配された保護資金によって動物遺伝子だけでなく植物遺伝子までもが退化し後世に継承させる生命活力遺伝子そのものを失いつつあることにあるのである。
- ・ それは表面上の財政赤字、不良債権の発生、未決済勘定の激増だけにあるのではなく少子化、虚弱体質など社会全体の衰退現象となって表れてきているのである。
- ・ こうして日本のバブルを検証してみるとアメリカ型のバブルとは全く別の原因によって発生したバブルであるだけに、その後始末は容易なことではないことが分ってくる。

4 . 構造改革のポイントは失われつつある生命遺伝子の復活にある...それには植物型社会には効果の薄いケインズ型投資依存政策から脱却し、自ら動物的遺伝子を再生させることにある。

日本の悲劇は動物型生命遺伝子を持った人達によって得られたお金が動物遺伝子を持たない日本の本丸社会に献上された結果、継承すべき遺伝子を持たない生活、備蓄米として内部の生活対策費に充当消耗され明日を競い合って生きる世界のマーケットに還流させるべき生命遺伝子が遮断され循環できなくなっていることにあるのである。

それは国政を司る政治、行政、関係者だけでなく経済、市場仲介人、学問、情報伝達者などが自ら動物競争社会における競争システムの本質が理解できないまま、本来動物型遺伝子活性化のために効用があるとされる財政による「ケインズ投資政策」にはまりこみ莫大な資金を投入しながら、その大半を浪費してしまったことにある。

それどころか日本では、安保、ケインズ、お上依存症が一段と高まり動物型生命遺伝子が衰え植物型遺伝子へと先祖帰り現象が進むだけでなく、その植物遺伝子の継承すら危うくなるほど生命力そのものが退化しはじめているのである。

自らリスクをとることを恐れ、決済を避け形だけの長寿とお金を求めるだけでは社会の富も生命力も継承されるわけではない。

それは政治、経済、社会生活、教育すべての面に共通して発生している現象であり、この動物型生命遺伝子の衰退こそが不良債権発生源となっているのである。

動物型生命遺伝子を退化させた社会では活力と汚物を選別する品質鑑定能力が衰え競争汚物が沈澱し、隣人を非難しあうだけで本物の付加価値が生まれることなく、未決済勘定による国家負担が増えデフレ不況を招いているのである。

この逆行現象から脱出する道は身をもって自ら生命力を高める方法を学ぶ以外に道はない。

そして日本古来の植物型遺伝子の長所を生かしながら世界中の動物型生命遺伝子を備えた国際競争社会メカニズムの本質を学んで共生する道を自ら模索するより再生の道はないのである。